納本

今事変とソ聯邦

パンフレット第五輯

參謀本部員砲兵中佐
齋藤浩三著

特 248
722

1

0011119000

0011119-000

特２４８－７２２

今事変とソ聯邦

斎藤浩三・著

湘風会

昭和１４

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特 248
722

納本

9

ンフレット第五輯

今事変と少国聯邦

參謀本部員砲兵中佐
齋藤浩三著

特248
722

序

本書は、永らく駐在武官としてソ聯邦にあつた著者が、本會主催思想戰講演會に於て、その豐富なる蘊蓄を餘すところなく吐露せられた講演の原稿に、更に著者自ら手を加へられたものである。

是は是とし、非は非とする軍人精神はこゝにも發揮されて、著者はいささかもソ聯を誹謗しようとしない。むしろソ聯に對する正しい認識の必要を强調してゐる。

我々が、本書を公刊し、精讀を願ふ所以も又實にこゝにあるのである。

昭和十四年八月二十五日

湘風會

昭和十四年九月五日 帝國本部

目次

一、ソ聯邦對外政策の變遷……一
二、ソ聯邦の戰爭思想……八
三、ソ聯赤軍の陣容……一五
四、極東に於ける軍備……一六
五、ノモンハン事件の概況……二〇
六、事變の處理と國民の覺悟……二五

今事變とソ聯邦

參謀本部部員砲兵中佐　齋藤浩三

ソ聯邦對外政策の變遷

東亞新秩序の建設と申しますることは、現代吾々大和民族に課せられましたるところの光榮ある歴史的偉業であります。この世界的偉業の完成を妨害するものに二つの有害分子があります。その一つは、東洋諸民族の膏血を搾取し、全東亞を壟斷せんとするところの老獪英國の資本主義的勢力であります。もう一つは、東洋後進諸民族の心底深く喰ひ込んで、これを赤化獲得せんとするところのソ聯邦の共産主義的勢力であります。

この英國の資本主義的勢力と、ソ聯邦の共産主義的勢力とは、我が日本を敵とする限りに於いて完全に一致し相寄り相援けて、抗日支那の一大背後勢力をなしてゐることは今更こゝに申上げるまでもありません。私は多少ソ聯邦に關係いたします仕事をして居りますので、唯今からいろ〳〵な角度からソ聯邦を檢討し、批判し、我々のこれに對處するところの對策について申述べたいと思ひます。

先づ一番最初に申上げますことは、ソ聯邦の對外政策であります。この對外政策といふのは、主にソ聯邦の

歴史的必然性から出發してゐることが多いのであります。その意味から多少長くなるかも知れませんが、私はソ聯邦の對外政策を歴史的に檢討いたしまして、それから事變との關係に漸次及んで行かうと思ひます。

ソ聯邦の革命の起りましたのは一九一七年であります。今年は三九年でありますから革命以來今日まで約二十年を經過いたして居りますが、その間に於ける對外政策の變化を時期的に大きく分けて考へますと、凡そ五期に分れます。最初の第一期は一九一七年から二一年頃に至る間でありまして、いはゆる革命に依つてレーニンを首領とするボリシエヴイキ一派が政權を獲得し、世界革命の烈々たる理想に燃えまして、いはゆる資本主義列强に對し敢然として世界革命政策を强行し、また內に對しては戰時共產主義を實行した時期であります。この時に於きましては、世界の何れの國とも正常なる國交關係は出來て居りません。

唯々一途にコミンテルンの線に副ひ世界革命政策に猪突猛進したのであります。假りに他の言葉でこの時期を名附けますならば、革命政策猪突時代とでも申しませうか。歐洲列國が國內の共產主義革命運動に對し最も手をやいたのはこの時期でありまして、ドイツ、イタリー、ハンガリーといふやうな諸國では共產黨がめざましい活躍をし、ハンガリーに於きましては一時政權が共產黨の手におちるといふ狀勢が出て來たのであります。

然るにソ聯邦が猪突しましたところの世界革命政策は、一九二〇年に至り俄然蹉跌を來したのであります。それはソ聯邦とポーランドとが戰を開始したのであります。最初ソ聯邦の軍隊は割合に景氣がよくてポーランド軍を擊破し、ポーランド國內に追擊いたして首都ワルソーに迫り、將にこれを屠らんとしたのであります。そ

の時ポーランド軍に有名なピルスヅキー元帥やシュミグリ將軍等が居つて、ソ聯邦軍に一大反擊を加へたのであります。この戰鬪に於きまして一敗地に塗れたソ聯邦は、初めて世界革命猪突政策が非常に危險であるといふことを自覺いたしました。

また對內的にもこのやうな戰時共產主義を强行いたしますると、民心が離反し、また國力が疲弊するといふことをこの時に於て自覺したのであります。

それで從來の猪突方針を變換いたしまして、稍穩健な政策に轉針いたしました。これを第二期と申しませうか、一九二一、二年頃から一九二六、七年に至る數年間であります。

この時期になりますと、ボリシエヴイキ政權は、將來に於ける社會主義的飛躍のためだと稱して、一時雌伏の態度をとりました。さうして國內にも彼等が最も嫌ふところの資本主義を取入れ、また外國に對しましては世界革命政策を大いに緩和し、逐次最も嫌ひな資本主義諸國と正常國交關係を結ぶことに努めたのであります。日本に對しましても芳澤、カラハン協定に依りまして一九二四年に正常な國交協定を結んだのであります。私はこの時代を革命政策反省時代とでも申したらよいかと思ひます。この革命政策反省時代は諸外國に對しまして大體に於て穩和政策をとつたのでありますが、こゝに見逃してならないことは、東洋に對する政策でありまして、これだけは聊か歐洲に對する對外政策と趣を異にしたものがあります。

一九二三年四月十二日に莫斯科に於て共産黨大會がありましたが、その席に於てスターリンが演說をいたしました。この演說は民族問題に關して說いてゐるのでありますが、かういふことを言つて居ります。「問題は二つに一つだ、帝國主義の强靱な對抗力、即ち東洋の殖民地的及び半殖民地的諸民族を覺醒し、これをうまく使つて帝國主義の沒落を促進するか、或は帝國主義に破れて我々の運動を弱めるか、何れか一つあるのみだ」と言ふてゐるのであります。これを要約いたしますと、東洋の殖民地的或は半殖民地的被壓迫民族、これをうまく操縱して日本の帝國主義と鬪ふんだ。さうして問題は二つに一つだ。帝國主義を吾々が打破るか、或は反對に吾々が破れるか、喰ふか喰はれるかのどつちかである、しつかりやれといふことであります。

この方針に基きましてソ聯邦は有名なボロージンや將軍ガロン等を支那に派遣しまして、或る時は蔣介石の北伐革命を援助し、或る時は左翼的な武漢政府を興して、蔣介石の南京政府に對抗させる等いろ〳〵な術策を弄して支那の赤色化を圖つたのであります。ソ聯邦がこの時代に考へて居りましたことは、究極のところ、資本主義、或は帝國主義列强に對しては、革命政策に依る正面よりの攻擊は反つて危險である。寧ろ帝國主義列强の背後力をなす東洋被壓迫民族を操縱し、これを赤化した方が宜いといふ戰術に變つてゐるのであります。換言すれば資本主義乃至は帝國主義打倒のために先づ東洋被壓迫民族をうまく操縱し、赤化することが出來れば世界革命が成就するのである。これは成功と否との運命を決する天目山であるといふ見解をとつたのであります。

嘗てレーニンが死ぬ前に遺しました「世界革命は東方に於て決す」といふ有名な言葉があります。この言葉と、スターリンの先程の言葉や考へは、私が今說明いたしましたソ聯邦の對東亞政策といふものと完全に一致してゐるのであります。ソ聯邦が今日行つて居る支那に對する政策といふものは、その根ざすところ斯くの如く深いのでありまして、決して昨日や今日の即興詩人的思ひつきではないのであります。このことを先づ第一に吟味する必要があると思ふのであります。

次に第三期に入ります。第三期は一九二八年頃から、一九三五年頃に亙るもので、この時代はいはゆる社會主義國家建設時代とでも言ひますか、自國內の建設に大童になつて居ります。さうして實力を養ひ、國力を培養するといふ方針であります。有名な第一次五ケ年計畫は一九二八年に始つて三二年に終り、第二次五ケ年計畫は三三年に始つて三七年に終つて居ります。この時代は國家の總力を擧げて第一次、第二次五ケ年計畫に邁進いたしましたので、從つて對外的には軋轢を起したくないといふ考へでありました。從つて成るべく外國との摩擦を少くする爲、西隣諸邦を初め歐洲各國との間に不可侵條約を締結する。

また日本に對しては、滿洲事變の勃發に依り非常に心配したのでありますが、すぐに日本の鼻息を窺ふために北鐵讓渡の申出でをする。或は米ソ國交回復を提唱する。或は從來彼等がブルジョア諸國の遊戲場であると罵倒してゐたところの國際聯盟に恬然として參加をするかういふやうに極力外國に對しては摩擦を避け銳意國

力の培養を圖つたのであります。此の時代を別な言葉で申せば平和主義協調時代であります。リトビノフが最も活躍したのもこの時期であります。さうしてソ聯邦の國際的地位は一躍高揚いたしまして、歐洲外交界の或る意味に於て重鎭と見られるやうな基礎を築き上げたのであります。

唯この時代の外交政策として變つて居ります點は、一般に對しては今の樣な協調政策でありましたが、支那に對してはやはり別な政策をとつてゐるのであります。即ち蔣介石が北伐革命をやつて居る時期に、支那に派遣されて居つたボローヂン、ガロンその他の顧問軍人連中は盛んに支那の赤化に魔手を伸ばしたのであります。然るにその行過から終に蔣介石のクーデターとなり、國共分裂といふ反對作用を齎したのであります。併し此のクーデターに依つて一時蹉跌はしましたが、陰險且つ執拗といふのがソ聯のあらゆる工作上の根幹をなしてゐるのでありまして、この相當大きな痛手にも屈せず、湖南地方に獲得しました中國赤色地區に於て依然として陰險な工作を續け、爾後數年間蔣介石が赤色地區の肅淸といふ事業にどれほど骨身を削つたか、また反對にソ聯のなしました工作が如何に根强く赤色地區に喰ひ込んで居つたかといふことは皆さん御承知の通りであります。さうしてソ聯の此の種工作が惹いて昭和十一年暮の西安事件となつたのであります。即ちこの間ソ聯は、執拗且つ陰險に少しの休みもなく巧妙なる裏面工作をやつて居つたのであります。

この第三期の社會主義國家建設は著々としてその成果を現し、リトビノフの平和主義外交も頗る成功を收めまして、一九三五年頃のソ聯邦は內外共に得意の絕頂にあつたと申してもよいのであります。かゝる得意の絕

頂に於て、いはゞ自己陶醉に陷りつゝあつた時代に突如としてソ聯の夢を驚かしたのは、一九三五年三月に起つたヒツトラーの再軍備の爆彈的宣言であります。當時旣に自己の力に對し相當の自信をもつて居りましたソ聯邦は、俄に西に勃興したドイツの壓力を感じ、また東の方では滿洲事變の成果により隆々と勃興する日本の强力なる壓迫を感ずるやうになつたのであります。そこでソ聯邦としてはまたこゝに對外政策を變更せざるを得ない破目に立ち到つたのであります。では如何なる方策を立てたか、これは御承知の人民戰線運動であります。私は人民戰線運動以下を第四期と考へて居ります。

第四期は一九三五年八月第七回コミンテルン大會を契期として始まつたものでありますが、人民戰線運動の內容が如何なるものであるかは旣に御承知であらうと思ひます。極く搔いつまんで申しまするならば、人民戰線運動なるものは世界革命政策の一過程として、限定目標に對する攻擊であります。而も其の攻擊の要領は、限定せられた目標に對して、目標以外の利用し得るあらゆる勢力を投合集中しようといふのであります。この人民戰線運動の決議に關聯して民族解放鬪爭竝に民族解放戰爭に對する支援の決議といふものがなされて居りますが、その一節をこゝにとつて見ますと、「總ての共產黨員は殖民地的或は半殖民地的被壓迫民族特に支那共產軍の、日本その他の帝國主義者竝に國民に對する民族解放鬪爭を、積極的に支援するの義務あり」とかういふ風に言つて居ります。

尙その次に、「支那共産黨はこの民族解放鬪爭の戰線を擴大し、日本その他帝國主義者の强盜的行爲に對して抵抗し得べき、あらゆる民族的勢力をこゝに集中せざるべからず」

かういふ風にいふて居ります。この決議がいはゆる抗日人民戰線のテーゼとなつたので、今次事變になりまして中國共産黨はこのテーゼを文字通り實行いたしてゐるのであります。

然るにソ聯邦のこの人民戰線運動に關する決議、換言すれば、日獨伊の全體主義國家群に對するコミンテルンの攻擊命令、これはその翌年に於て思はざる反作用を生んだのであります。それは一九三六年即ち昭和十一年の秋に現はれましたところの日獨防共協定の締結であります。更にその翌年昭和十二年秋イタリーの防共協定加入となり、こゝに非常に强力無比な反作用となつたのであります。これまでの過程を私は第四期、別の言葉でいふならば人民戰線運動期とでも名付けたいのであります。以上申述べましたところに依りまして御判斷をいたゞきたいのは、ソ聯邦現在の對支政策が何處にその源を發してゐるか、またこれらが如何に發展するであらうか、只今私が申述べましたことを基礎にいたされましてお考へになりますならば、多分御判定がつくものと考へる次第であります。

ソ聯邦の戰爭思想

これで一應對外政策に關する說明を打ち切り、もう一つ注意しなければならないことについて申上げます。

それはソ聯邦の戰爭思想に關する問題であります。ソ聯邦の戰爭思想は革命以來旣に幾度か變遷をいたして居りますが、戰時共産主義時代に於ては、もとよりソ聯邦に確たる戰爭思想はなかつたのであります。それが如何にもソ聯邦らしい戰爭思想だと思はれるやうなものが出來たのは、やはり戰時共産主義時代を經過して、新經濟政策時代に入つた頃であります。その頃のソ聯邦の軍備は、まだ頗る貧弱で、國內戰に參加した赤衛軍を大急ぎで赤軍に改變したといふに過ぎなかつた狀態であります。

この時代に初めて一世を風靡いたしましたのがスエーチンといふ人の說であります。彼は帝政時代露國陸軍大學の敎官であり、革命後に於ても革命政權から招かれて、再び赤軍大學校の敎官となつた人であります。

彼は「消耗戰略論」といふものを唱へて居りますが、それは國と國とが戰をする場合に、武力の戰は敵國の戰力及び國力を消耗させるための一つの手段でしかない。戰爭の最後の決をつける爲には武力だけではいけない。目指すものは敵の國力を消耗させるにある。さうして敵國の內部の政治的及び經濟的攪亂を誘發する。それに更に、思想的赤化革命工作を併用するんだ。それに依つて初めて戰爭最後の決をつけるのだといふのが消耗戰略論であります。有力なる資本主義國家の包圍下にあつて、而もまだ自己の軍備に十分の自信をもち得なかつたソ聯邦が、政治的、經濟的攪亂工作、或は思想的赤化工作といふものに非常に依存したといふことは、當時の狀勢から當然すぎるほど當然なことゝいへるのであります。

然るに一九二六、七年頃、つまり新經濟政策から一國社會主義建設政策に入つた頃になりますと、ソ聯邦の

國内秩序も漸次良好になり、工業化政策もだん〳〵と進んで參りましたこの頃になりますと、新なる理論が生れて來て居ります。それは一國の戰力は鐵の分量に比例するといふ思想でありまして、これを唱へたものはズーロフといふ人であります。これには元帥トハチエフスキー等高級インテリ軍人が贊成したのであります。大體ソ聯の軍人は能力が低いのでありますが、ト元帥は帝政時代からの參謀將校で當時ソ聯邦の軍人の中では最も頭の優れた人であります。この連中がこれに唱和しまして、「殲滅戰略論」といふものを唱へたのであります。つまり政治的、經濟的、或は思想的各種の手段をもつて敵を崩さうとしても、そればかりでは駄目だ、戰爭の決をつけるものはやはり武力戰だ。かういふいひ方であります。武力戰に依つて敵に甚大なる損害を與へたならば、それが本となつて敵は經濟的にも、政治的にも、思想的にも崩れるんである。武力戰に負けては今のやうな工作は成り立たんといふ思想であります。この思想が興りますと、前のスエーチンの消耗戰略論は壓倒されてしまひ、スエーチンは敗戰主義者であるといふやうなことで、賣國奴的の扱ひを受けるまでになつたのであります。このトハチエフスキー等の殲滅戰略論の發展に伴ひまして、ソ聯邦の唯物的軍備は非常に躍進を見ました。即ち此の一派の唱へまするところに依つてソ聯邦は從來の作戰方針を一擲して新しい作戰方針をとつたのであります。そしてそれを完全に遂行せんがためには、しか〳〵の軍備を擴充しなければならんといふことをいひまして、厖大な物質的軍備の擴張を斷行したのであります。その狀態は後に申上げます。

この殲滅戰略論は一九三六、七年頃まで非常にもてはやされたのでありますが、その頃になつて有名なトハチエフスキー一味有力軍人の肅清事件に依つて沒落をいたしました。さうすると今迄さういふことをいふて居つたものは皆國賊になつてしまつたのであります。

今度はこゝに新しい思想が生れて來なければならなかつたのであります。どんな思想が生れて來たかと申しますと、これは明瞭には現はれて來ませんでしたが、大體トハチエフスキー等の唱へて居りました殲滅戰略論に、昔のスエーチンの消耗戰略論が割り込んで來たのであります。殲滅戰略論と消耗戰略論との兩方が一緒になつて進まうといふやうな思想に變つて來たのであります。言ひ換へますと、ソ聯邦は赤軍をもつて飽まで武力的殲滅戰爭をやるのだ。併しその外にあらゆる總力を擧げて消耗戰略をやるんだ。兩方並行して行かうといふのであります。

この思想が何處に現はれて來たかと申しますと、例へば、日獨伊等、彼等の考へて居る最大敵國に對してはあらゆる機會を捉へて消耗戰略を行ふのであります。或はスペインの赤色政權を支援して、ドイツまたはイタリーの戰力、國力の消耗を來す。或は現在の如く蔣介石政權を援助し、これに長期抗戰を强調して日本に對し消耗戰略を行ふといふやうなやり方であります。此等の事情から顧ますれば、日本とソヴイエトとは既に大分前から消耗戰略といふ形式に於て、完全なる戰爭狀態に入つてゐたといふことが出來るのであります。

これで大體ソ聯邦の對外政策、特に極東に對するところの政策、それから戰爭のやり方といふことについてお話を申上げましたから、それならば今度の支那事變に對して、ソ聯が實際に如何なることをやつてゐるかと

いふことを申上げます。

只今まで申上げましたところから考へまして、ソ聯邦が今度の支那事變に於て、企圖してゐるところの考へは二つあるのであります。一つはその遠大なる世界革命の理想に出發した支那の赤化獲得、今一つは日ソ必ず戰はなければならない危險におかれてゐるものとして、その觀念から出發したところの對日消耗戰であります。

一體今度の支那事變の發端に就いて考へる時に、誰がこのやうに大規模な全面戰爭が起ることを希望したのでありませうか、日本がこのやうな悲慘な大規模の全面戰爭になることを衷心回避して居つたといふことは皆さん十分お分りであります。當時陸軍に於きましても、支那放棄論を唱へた人さへあつたのであります。支那から總ての居留民は引上げろ、その代りに滿洲をしつかり守らうぢやないかといふ、それ位悲壯な決意をもつた考へ方もあつたのであります。

それなら誰が戰爭を起したか、蔣介石か、イギリスか、ソヴエト聯邦かといふことになると思ひます。これを解剖して見ますると、先づ第一に蔣介石の誤つた侮日、抗日政策が事變勃發の最大原因であつたことは申すまでもない。併しながら蔣介石が果してあの時期あの狀態に於て對日戰爭の勃發を希望したでありませうか、私は確信をもつてさうぢやないといふことを言ひ切れるのであります。無論蔣介石が何れかの日に於て日本と一戰を交へるといふことは期して居つたでありませうが、あの頃あの狀態で對日戰爭が起つたならば、支那に勝ち目のないといふことを最もよく承知して居つたのは賢明なる蔣介石であつたのであります。さうすると蔣

介石がやつたんでないといふことになる。

それならば第二の嫌疑者イギリスはどうであらうか。これは決して日支の武力衝突を希望しては居りません。勿論英國が蔣介石を援けるところの援蔣政策、これが蔣介石をして誤らしめ、侮日抗日に油を注いだことは疑ひの餘地はありません。併しながら由來老獪で而も利害に敏感なイギリスに、日支衝突に依つて厖大なる在支權益を失ふ、非常なる損害を蒙るといふことが見えない筈はありません。さうするとイギリスでもない。

殘るところはソ聯邦であります。ソ聯にとりましては日支の武力衝突といふものは、先ほど申しましたやうな彼がかねて念願して居りますところの對支赤化政策の推進、また對日消耗戰略の遂行、この二つの重大目的に對し何れにも一〇〇%有效なのであります。その規模が大きければ大きいほど、長ければ長いほどソ聯にとつては都合がよいのであります。

今度の事變の如きも見方に依りましてはソ聯邦の謀略的工作に依つて勃發したものとも考へられるのであります。果して事變勃發後間もなくソ支間に不侵略條約が締結されたり、十年の長きに亘つて軋轢鬪爭を續けて居つた國共合作が出來上つたり、或は外蒙古に對する密約の成立等、要するにソ支共助協定といふものが次々に出來上つて行つたことを見ますると、蔣介石とソ聯との間に非常に緊密な事前の默契があつたと見てよいのであります。

それならば支那とソ聯との十分緊密な連繫の下に捲き起されましたこの事變に當り、ソ聯は物質的には如何

なる工作をやつてゐるか、これはもう御承知の通りあらゆる方法をもつて支那を援けて居ります。新疆方面の赤色ルートに依りまして飛行機を供給すること今日に至るまで既に千數百機、その他大砲、小銃、砲彈、かういふものを續々と送つて居ります。また軍事顧問、教官、飛行士、技術者、かういふものを多數派遣して居ります。また最近に於きましてはソ聯邦と支那との連絡をよくするために、西北地區に對していろ〳〵の建設工作を進めて居ります。例へば、西北地區に於けるところの軍事建設を援助するために、ソ聯邦の建設軍團が派遣されてゐるのであります。また一說には、隴海線の西安から蘭州、迪化を經て、ソ聯のトルクシブ鐵道に出て中央アジヤに至る鐵道を建設中である。その他申すならばソ聯の西北支那に對する各種建設工作といふものは實に枚擧に遑のない位あるのであります。

この外、國共合作の線に副ひ支那に對し徹底的抗戰を要望し、共產黨または共產系分子をもつて支那政權に對して深く喰ひ入らうといふ工作もある。中でも共產黨または共產軍の皇軍占據地に對するところの工作、特に思想的及び武力的ゲリラ戰術の展開、これらのあらゆる工作はどれ位帝國の新支那建設に大なる障害となつてゐるでありませうか。

斯くしてソ聯邦は步一步と對支赤化政策の進出を圖りつゝ、頻りに蔣政權を鞭撻し、大衆を煽動して對日消耗戰を起しつゝあるのであります。尙列國を誘つて對日共同妨害工作を敢てせんとし、また滿洲に於ける共產匪賊團を唆かして、滿洲國の治安を紊し、或はまた滿ソ國境に近く非常に尨大なる武力を集中いたしまして、

皇軍の武力をその方面に牽制をする。その他各種各樣の策をもちまして帝國に對し不利な工作をやつてゐることは皆樣十分御承知の通りであります。

この間ソ聯首腦部、特に赤軍中央部の有力者間には、昭和十二年、事變が勃發しました年の秋から、十三年の初頭にかけて、對日開戰論が盛んに流行したのであります。今でこそ過ぎた歷史的一現象としてしか考へられないのでありますが、一時的にもせよ對日開戰論といふものがソ聯中央部に於て眞面目に論議され、檢討されたといふことは、我々として深く考へなければならないのであります。

ソ聯赤軍の陣容

次には以上申述べました狀勢の下に、現在赤軍は如何なる陣容をもつてゐるかといふことについて申述べます。現在赤軍の軍備の方針といふものは、處刑されましたトハチエフスキーが立てたものをそのまゝ踏襲して居ります。つまり武力戰に於きましては飽まで殲滅戰略に出て居ります。即ち一つは接壤國に對しては侵入策戰に依つて、即戰即決を期し得るところの兵力を常に保持する。例へば日本に對しては徹頭徹尾侵入して行く策戰をやる。さうして速かに之を叩き潰してしまふ。これに必要なる武力を常に持たうといふことであります。二つには、近代戰の特色として宣戰布告することなく戰爭狀態に入ることがあるから常備軍の大きいものを持

たなければならない。それで平時から戰時の編成に近いものを持つといふことであります。三番目に近代戰には裝備が大切である。特に飛行機であるとか、機械化部隊、砲兵、ガス、かういふものが優秀でなくちやいかん、(このことは後で申上げます。)四番目は、ソ聯の兵備は西方ヨーロッパに對し獨力作戰を遂行すると共に、同時に東方に對しても獨力をもつて作戰をなし得ることを目標にしなくちやいけない。西はヨーロッパに對し、東は東洋に對して、同時に獨立作戰をやるんだ。かういふことであります。

それならば以上四つの方針に基いて、現在赤軍はどれ位の兵力を備へてゐるか。一九三八年のもので申しますと、歩兵は百五師團、騎兵師團三十三。飛行機の數が六千五百。戰車が七千五百。總兵力が約二百萬であります。これが今後二年位經ちまして一九四一年頃になるとどれ位に增加するか、向ふの計畫をいろ〳〵な角度から考へて推定しますと、飛行機は一萬になる可能性がある。戰車は約九千位にはなります。兵員は二百四十萬に躍進するのであります。

極東に於ける軍備

次に只今申しましたソ聯全般の軍備、これに基いて、極東の方はどうなつてゐるか。何を考へ何を準備してゐるのかといふことを申上げます。昨年ミュヘン會議の時に、ソ聯は英、佛、獨、伊から除外されまして、その頃まで華やかでありましたソ聯邦の國際的地位といふものが、此の會議に於て一葉落ちて天下の秋を知るといふやうな寂莫感を感じさせたのであります。ところでソ聯邦の最も障碍とする宿敵は何かと申しますると、東は日本、西はドイツ及ポーランドであります。これが先づ怖いものであります。

ところがドイツがオーストリヤを併合し、チェッコを併合し、今度はダンチヒに向つて攻勢態度をとつてゐる。かうなつて來ますとポーランドとドイツとの間が非常に惡くなります。又チェッコといふ國はロシヤの最も有力な味方であります。チェッコをドイツに併合されたといふことはソ聯にとつては非常に恐しいことであります。併しながらその後間もなくこれらのことから、殊にダンチヒの問題に關聯して、ポーランドとドイツとの仲が惡くなつた。無論前から惡かつたのでありますが、今や非常な緊張狀態にまでなつて來た。これはソ聯にとつてはチェッコを失つたよりも、このドイツ、ポーランドの不和がだん〳〵募つたといふことは、差引き得かも知れない。

また最近皆樣御承知の通り、イギリス、フランス、ルーマニア、土耳古等がロシヤに對して非常に色目をつかつて居ります。つまりヨーロッパ方面に對しましてロシヤは近頃大いに餘裕が出來て來たのであります。外交的にも又軍事的にも多大な餘裕が出來て來たのであります。今まではヒョッとすると、ドイツ、ポーラン

ド、イタリー、かういふものが一緒になつてロシヤに對して攻勢をとるかも知れない狀態にあつたのでありますが、近頃はロシヤの方としてはチエツコを失つたけれども、ドイツとポーランドの仲が惡くなり、而もイギリスとかフランスとかトルコとかいふものが隨分色目を見せてゐる。差引きヨーロツパに對してロシヤは樂になつて來た。

それではその餘つた力は、何處に振向けられるかと申しますと、これは當然日本に向けられる事になつて來たのであります。私共は最近日本に對して向けられるところのソ聯邦の壓力の增加といふものを、屢々と感じてゐる次第であります。ドイツに對しては最近非常にオベツカを使つて居ります。然し日本にはどうでありませうか。漁業問題にしても樺太の石油及石炭利權の問題にしても、非常に傲慢無禮な態度を示して居ります。殊に只今は西部滿洲國境に於きまして非常な無禮を敢てしてゐるのであります。西に於て政策を緩和し、東方日本に對してロシヤは今やその爪牙を磨いてゐるのであります。

それならば現在滿洲國境にどれ位の兵力を集めてゐるか。これを簡單に申します。歩兵師團二五。騎兵師團六。飛行機千八百。戰車千七百。兵員にしまして四十數萬。海軍に於きましては、ウラヂオ附近にある潛水艦隻數は少くも九十。右の外第一線の兵備を備へるばかりなでく、後方交通運輸の施設、或は糧秣軍需品等の製造貯藏の施設、或は國民銃後の運動等かういふやうなものをあらゆる方面に亘り眞劍に準備をしてゐるのであります。

以上のやうな狀勢の下に於きまして、帝國は東亞新秩序の建設といふ歷史的大聖業に向つて上下一心一体となり、血みどろの奮鬪を續けてゐるのであります。

然るに蔣介石政權は依然として世界の公敵であるところの赤化勢力と結合し、今尙抗戰繼續を叫んで奥地に地方政權的存在を續けて居ります。ソ聯邦はまたこの蔣政權の態度を以つて奇貨措くべしとなし、頻りに中國共產黨を唆し、多大の努力をもつて西北支那に於ける赤化勢力の獲得强化、皇軍占領地域内のゲリラ戰を企圖してゐるのであります。現下の狀勢は見方に依りましてはソ聯の意圖する如く動きつゝあるとも思はれる。また今後ソ聯の陰險執拗なる對支政策が、益々熾烈を加へることはあつても、斷じて衰退することがないといふことはほゞ考へられるのであります。將來、今事變の過程に於きまして、蔣政權が聯ソ容共政策の非を悟りまして、飜然その態度を改めることがあるかも知れません。併しながら斯くの如き事態が到來いたしましても、この東洋に横行し或は潛行して居りまするところのあらゆる赤化勢力が、根本から芟除されない限りは、ソ聯邦の陰險執拗な策謀が依然支那大陸に於て繼續せられ、支那民族心理の一端に殘つてゐる抗日意識を煽動するならば、我々の企圖して居りまする東亞新秩序建設といふ理想は、永久に到來しないとも考へさせられるのであります。從つて今後の東亞新秩序建設といふ事業は、言ふことは易いのでありますが、その實際は前途頗る多難であります。

支那事變が起りますまで、日本とソヴイエト聯邦との勢力は僅に、堅く鎖された滿洲國と極東ソヴイエトとの國境の一線に過ぎなかつたのであります。然るに今日に於きましては、日ソ勢力といふものは北はカムチヤツカ、樺太から、滿ソ國境線を通りまして、外蒙古境界から、南は支那本土の中央を通り、更に南支に及び、延々實に七千キロの線をもつて相對することになつたのであります。支那と對峙してゐるのではない。赤色勢力と對峙してゐるのであります。從つてこの事變の根本解決といふものは、單に支那を屈服せしめるのみをもつて足れりとしません。先に申しましたやうに、必ずやその背後の最大勢力であるところの赤色勢力といふものを根本から芟除し破碎し、なければ眞の明朗なる東亞の黎明といふものは期待し得られないのであります。

ノモンハン事件の概況

さて、日ソ間が以上の如き關係に置かれてゐる折も折、五月の中旬、滿洲國西北境ホロンバイルに第一次ノモンハン事件が捲き起りました。私は五月二十五日に東京を出發してノモンハンに急行し此事件を視察しましたが、それが割合に早く片づきましたので、その後北滿國境方面をグルツと一巡いたしました。

その途中六月中旬になりまして、更に再び、ノモンハン方面風雲急なりといふ報を受けまして、そちらに參り、一昨々日飛行機で歸つて來たのであります。この事件について簡單にお話したいと思ひます。

ノモンハン事件と申しますのは、實は既に本年の一月頃から萠して居つたのであります。

滿洲國領であるホロンバイルには蒙古人ばかりが住んで居ります。そこと外蒙との境には河幅六十米乃至百米位ある哈爾哈河が流れて居ります。從來はその哈爾哈河が、滿洲國と外蒙古との境界といふことになつて居つたのであります。

然るにこの一月頃から、外蒙側いひがへればソ聯の、軍人、或は警官が、だん〳〵と哈爾哈河を越えて滿洲國に侵入して來出しました。こちらはそこに軍隊はおいて居りません。唯滿洲國の警官が（主に日系警官でありますが）警戒して居りましたが、だん〳〵追ひまくられて後へ退つて來ました。五月頃になりますと、敵は正規軍隊をもつて來まして、哈爾哈河を越えたこちらに、堅固な陣地を築造し、滿洲國領を蹂躙し日滿軍に挑戰を敢てしたのであります。

これに對しまして、その方面の我が守備軍は、五月十五日、勇敢な故東部隊長を隊長とする一部隊を派遣しまして、これを驅逐いたしました。敵は一旦哈爾哈河を越えて退つたので我が軍も直ちに後方へ退りました。さうしますと、その際を狙つて敵はまたゾロ〳〵と入つて來て、五月二十四、五日頃にはまた元の陣地を占領してしまつたのであります。そこでこちらは〇〇部隊を編成いたしまして、五月二十八日に敢然起つて進擊を開始し、敵を哈爾哈河の向ふに擊退したのであります。ところが、皇軍はもとより不擴大方針でありますので敵を擊退いたしまするや、アツサリと原駐地に皆引上げてしまひました。

さうしますと、六月に入つてまた三度目の侵入をして來たのであります。それが今度の第二次ノモンハン事件であります。六月中旬に侵入して來ました敵の兵力は、歩兵一師團、外蒙古の二師團、飛行機八百、戰車裝甲車五百、大砲六十門、かういふ尨大なものであります。この方面は一面の草原地帶でありますから、自動車でもつて動かなければならない、そこで敵は自動車五千臺といふ數をもつて來たのであります。

これに對しまして、我軍の兵力は非常に少いものをもつてやつたのであります。飛行機にしても百數十機、戰車にしまして僅に數十臺、この劣勢な兵力をもちまして、空中戰などに於ては、六月の二十二日頃から毎日敵機何十機を墜して居ります。地上戰に於きましては、敵裝甲自動車三百餘といふものを破壞して居ります。新聞に書きまするこれらの戰果があまり景氣が好いので、事實かどうか疑ひがあるかも知れませんが、これは實際の數字であります。飛行機の戰鬪では、私共考へまするに、こちらが一機を失ひまする犧牲をもつて、向ふの十機以上はやつゝけてゐるやうに見て居ります。

いろ〳〵面白い話を申上げたいのでありますが、時間の關係上省きまして、唯この間に於て、我が將兵がどの位苦勞してゐるかといふことを申上げようと思ひます。

先程申しましたやうに、この一帶は、丁度芝生のやうな短い草が生へてゐる草原地帶であつて、その間に砂地がありますが、木といふものは一本もありません。家といふものも殆どない狀態であります。また物資も何もありません。唯、蒙古人が飼つてゐるところの牛とか、羊とか、さういふものがあるだけであります。さういふ狀態でありますから、我が將兵は、六月二十二日から行動を起して、今日に於てもまだ戰つてゐるのでありますが、屋根の下で寢ることが出來ないのであります。

また水がない所でありますから、殆ど飲んでゐない有樣であります。といふだけでは分りにくいかも知りませんが、水が飲めないから非常に体が疲れるのであります。水がないので御飯は炊くことが出來ない。無論、顏なんかとても洗ふことなど出來る筈がありません。御飯が炊けないから、兵隊は乾麵包を食べて過さなければならない。ところがこの乾麵包を食べますと、どうしても水が飲みたくなる、ところがその水がないのであります。

そんなわけで、水にありつくまでは、數日間ろくにものも食つてゐないといふのが實狀であります。

日の暮れるのが夜の十時で、夜の明けるのは三時半頃であります。晝間は百三十度から百四十度に昇る熱さで、それが夜になると、零下にまで下り外套を着なくちやならない寒さであります。

敵の飛行機は非常に多いから、勝手な時に三十機、四十機と編隊を組んでやつて來ます。我が軍の方では、國境を越えてはならぬといふ嚴命を受けてゐるのであるから、こちらから出て行くわけでなく、敵が侵入して來るのを待ち受けてゐるのであります。それだから何時でも、三機なり五機なり飛んでゐなければならない。朝から日の落ちるまで、常に飛んでゐるのでありますが、兵力は少くて、飛行隊の苦勞は大變なものなのです向ふは、ワツと、一時に澤山でやつて來ますが、こちらの滯空してゐる飛行機は僅に三機か四機で、それでも

つて、三十機、四十機の敵の中に飛び込んで行くのであります。

また、こちらの戰車は、僅に數十臺しかありません。敵は四百乃至五百といふ數、旅團にしまして五箇旅團位來て居ります。こんな多數の敵と張り合つて敵戰車三百を壞すといふやうな戰果をあげてゐるのであります。その立派な戰果の蔭には、非常に尊い犧牲と口では申されないほどの辛酸苦痛に堪へて、將兵のいたましい努力が拂はれてゐるのであります。

今度の事件に於て特に感じましたことを申し上げますと、從來屢々ソ軍の戰力は驚くに足りないといふことが申されて居りましたが、今度の戰ひを見まして、つら〳〵この考へが間違つてゐるといふやうな、新しい印象を受けたのであります。勿論、我が方として十分の備へさへあれば、決して驚かされるに足りないのでありますが、大体今まで、ソ聯の軍隊は精神的に成つて居らんといふ風によくいはれて居つたのでありますが、今度の戰ひの樣子を見まするとと、決してさうぢやありません。攻擊精神といふものはなか〳〵旺盛であります。飛行機が一回の空中戰で九十八機も墜ちたことがあります。大てい毎日二十機、三十機と束になつて落されて居りますが、今になつてもまだ毎日墜されに參るのであります。その攻擊精神に至つては、私は實に見上げたものだと思ひます。

また戰車の攻擊も大体四十乃至五十位の敵戰車が一集團となりまして、それが草原の凹いところを通りまして、突然我が軍の三百米乃至五百米の前方にワツと出て來るのであります、こちらは大急ぎで大砲を向けてバ

リ〳〵擊ち出すのですが、大てい三發目位には戰車に命中します。命中した瞬間、パツと火が出て燃え上る、さうして五時間、六時間位燃え續けるのでありますが、後から行つて中を開けて見ますと、乘つてゐる人は白骨になつて、きれいに火葬されて居ります、その攻擊ぶりは、前の戰車が擊たれて火が出ると、後の戰車はそれを乘り越えてやつて來る。それがまた擊たれる。とその次がまた乘り越えて來る、甚しいのは十米位前までやつて來るといふのもあります。兎に角來るたけの奴は皆やつゝけますが、併し、やられても〳〵乘り越え〳〵攻擊して來る、そこに私は非常に强い攻擊精神があることを認めるのであります。

この攻擊精神が、帝國の軍人のやうに、忠君愛國の精神から出てゐるものか、或は、ピストルで强要された攻擊精神であるのかその何れであるかは知りません。併しながら、何處に原因があるのかは分らないが、兎に角全滅する迄やつて來るのであります。

更に、機械力、物質力に至りましては、相當優秀なものがあります。今年三月十八日に開かれた第八回コミンテルン大會に於きまして、ソ聯陸軍大臣ウオロシーロフ元帥は、「ソ聯軍備の現狀」と題して、非常に長い演說をして居ります。その中に、ソ聯陸軍の戰鬪力を、他の列强の軍隊のそれに比較した一節があります。ソ聯一箇軍團のあらゆる大砲、小銃、機關銃といふやうなものに依つて、一分間に發射し得るところの鐵の總量はいくらかといふことを、他の國の軍隊に比べて居ります。それに依りますと、フランスの一分間の發射鐵量は約六萬瓩であります。ドイツが五萬九千五百瓩であり、而してソ聯赤軍は七萬八千九百瓩、約七萬九千瓩であ

ります。かやうに、非常に優秀な編制をもつてゐるのであります。更にウオロシーロフはいつて居ります。「今比較したのは、ドイツとフランスである。日本ポーランド、その他諸國の軍隊に關する資料も手許にある。併し、日本やポーランドの軍隊のことはいはない。何故かといへば、これらの諸國に於ける軍隊の編制裝備はドイツ、フランスの軍隊に比して、全然比較にならぬほど劣つてゐるからであると傲言して居るのであります。

事變の處理と國民の覺悟

支那事變の處理といふことは、いふまでもなく現下の急務であります。併しながら我々は、この事變の處理過程に邁進する一方、常に北の方ソ聯邦といふものゝ存在を忘れてはなりません。只今申しましたやうに、日本の國力、武力を、甘く目の下に見下しまして、只管その牙を磨いて機會を狙つてゐるところの、極東四十萬の赤軍は、夢にも忘れることは出來ません。若しも我が軍が、北に對する備へに手を拔いて、聊かの缺陷を生じたならばどうでありませうか。ソ聯赤軍は直ちにその虛を突いて、滿洲國境に侵入して來るに違ひないのであります。我々は支那事變の解決に努力する一方、同時に北方の敵に對して、萬全の備へをもつておらなければならないと感ずる次第であります。

最早ベルサイユ平和條約、その他數多の國際間に於ける平和規約は、總て一片の反古と化して居ります。將に實力をもつてものをいふ時代が來てゐるのであります。如何に老大英國があがいても、鐵壁の陣を誇る獨伊の軍備に對しては全く手が出ません。獨伊は非常に經濟的に苦しいのでありますが、併しながらその國民は、あらゆる困苦と闘ひ、缺乏と闘ひながら、一朝有事の日に備へるために、全力を傾倒して立派な軍備を整へ、これを充實しこれを維持してゐるのであります。でありますから如何にイギリス、フランスその他の邪魔が入りましても、敢然としてエチオピヤの攻略をやり、スペインの内亂を平定し、オーストリヤも併合すればチェツコも併合したのであります。その成功の蔭にはドイツの無敵軍備が嚴然とものをいつたといふことが出來るのであります。

今更この時世に於きまして、軍備は不生産的存在であるといふやうなことを、おつしやる考へ違ひな方はあるまいと思ひます。

況して帝國の軍備といふものは、生産的であるとか、不生産的であるとか、さういふやうな利害打算から論ぜらるべき性質のものではありません。帝國軍備の必要性といふものは、申すまでもなく、八紘一宇の肇國の理想から出發いたしましたところの、東亞新秩序の建設といふ、一大聖業達成に絶對的に必要なるところの要求から生れた軍備なのであります。

殊に吾々は先程から申述べましたやうに、量と機械力の應用、つまり物資的綜合戰力に於て、世界に冠絶して居りますところのソ聯赤軍を我が當面の宿敵としてゐるのであります。帝國陸軍といたしましては、是非とも彼を壓服せしめるだけの十分なる軍備を常から備へてをかなければならないのであります。

私は、現下の情勢に於て因より支那事變の處理に十分の力を盡さなければならないことに異論はないのでありますが、此の間北の方ソヴェトに對する軍備を、あらゆる困難を排して急速に整備することが、同時に非常に必要であるといふことを確信し、皆様によく理解していたゞいて御考慮を願ひたいと存んずる次第であります。

北滿、或は蒙疆、中支、更に南支に於きまして、灼くか如き炎熱の下に、あらゆる艱苦を忍び、或は國境の警備に、或は前戰に奮闘されてゐるところの皇軍戰友各位に對して御健闘を祈りつゝ私の講演を終ります。

（昭和十四年七月十一日夜、湘風會主催思想戰講演會に於て）

昭和十四年八月二十日印刷
昭和十四年八月二十五日發行
（定價十錢）

著者　齋藤浩三
發行人　藤谷玄雄
横濱市中區宿町二丁目三十六番地
印刷人　原田武次郎
印刷所　共働印刷社

不許複製

發行所　横濱市中區本町六丁目六十一番地
湘風會

395
417

湘風會パンフレツト

總力戰に就て	高嶋辰彥著	既刊
戰時下産業經營	桐原葆見著	既刊
物資統制に就て	山田秀三著	既刊
日本なくんば亞細亞なし	永井柳太郎著	既刊
今事變こそ聯邦	齋藤浩三著	既刊

95
17